味と匂い研究会2013年度活動報告

岩﨑陽子

０．2013年度活動概要

当研究会は、五感の中でも比較的先行研究の乏しい「味覚」と「嗅覚」を取り上げ、それらの特性を検証した上で、感覚による世界認識の新たな在り方を、アート・デザインのかたちで提言することを目的として2012年4月に設立された。

メンバーは京都嵯峨芸術大学の教員である真板昭夫（観光デザイン）、坂田岳彦（デザイン）、山本直樹（現代アート）、岩﨑陽子（哲学・美学）が中心となり、かつ学外からも井上健司（株式会社松栄堂）、井上貴元（味香り戦略研究所）各氏を加えた構成員から成る。

前年2012度は嵐山吉兆の徳岡孝二会長をお招きして「嵐山吉兆の大切にする味と香り」というテーマでお話を伺うなど（2012年京都嵯峨芸術大学『紀要』参照）、味と匂いをめぐる問題圏を検討し、外部知見を取り入れながら研究の方向性を模索する段階にあった。

今年2013度の大きな成果としては、第一に当研究会が2013年4月より3年間、日本学術振興会の科学研究費助成事業から助成を得たことがあげられる。また第二に、今後の研究のための基礎データを取得するために、本学向いに位置する高齢者福祉総合施設「あらしやま健光園」にて、味香り戦略研究所の指導の下、本学学生が高齢者に匂いに関するヒアリング調査を実施したこと、第三に学生企画による香りのアート作品の展示プロジェクトが発足したこと、そして第四に研究メンバーである山本直樹が、当研究会の成果を生かして香りによるアート作品を個展で発表したことがあげられる。以下、順に上記四点について詳述する。

１．科研費取得

「『味と香り』による空間のユニバーサルデザイン」（研究代表者：坂田岳彦）という研究題目で、2013年4月より日本学術振興会の科学研究費助成事業から3年間の研究助成が得られることとなった。以下、当該研究内容について説明する。

研究題目である「『味と香り』による空間のユニバーサルデザイン」とは、嗅覚と味覚による共同体の結びつきの在り方を解明し、香りと味による新たな空間デザインの可能性を探るものである。

嗅覚と味覚は、人間にとって根源的感覚であり、共同体の結びつきに重要な役割を果たしていると考えられる。現代社会において、人が集まる場所・集まりたくなる場所にはどのように嗅覚・味覚が関わっているかを調査によって抽出・分析する。

またそれに加えて、こうした考察を元に新しい人間の結びつきの在り方を可能にするような仕掛けや提言を、「香りと味による空間デザイン」として提示する。

特にユニバーサルデザインの方法を用い、従来デザインやアートの現場で抜け落ちてきた嗅覚と味覚を使って、それらの潜在的な可能性を事例研究によって掘り起こす。

またこれを基礎データとして体系化し、今後の有効な活用法として提示することを目指す。

そもそもユニバーサルデザインの多くが道具や用品、生活空間などのハード的な仕様に関する研究を主としてきたのに対し、研究代表者（坂田）は主に視覚・聴覚媒体におけるソフト的なユニバーサル性の研究を行ってきた。視覚・聴覚よりもさらに曖昧とされる嗅覚・味覚を刺激することで、新たなユニバーサルデザインの提案ができないか、という思考が本研究に至った経緯である。

嗅覚とデザインとの結びつきは、これまで商業の分野においてはいくつかの試みがみられる。料理店の店頭で、人工的に作り出した匂いを散布して集客を行うなどである。しかし、非営利の公共空間において、匂いや味を情報媒体としたユニバーサルデザインというものはあまり例がなく、本研究を通して、新たなデザイン領域として提案することを目指している。

そのためにまず、匂いと味が社会生活の中でいかなる役割を果たしているかについて、いくつかの仮説を立て、香りと味に関わる民間企業の協力を得ながら、それらを特別養護老人ホーム等でのいくつかの事例研究を通じて検証し、基礎データを得ることとする。

その上で、ユニバーサルデザインの立場から、人間の嗅覚と味覚を利用して、より快適で美しい日常生活へと、どのような提言が可能であるかを検討し、デザインやアートによって社会にアウトプットする。具体的には「香りと味によるワークショップやプロジェクト」、「アートの展示」などを実施する。嗅覚と味覚による共同体の結びつきを明確化し、ユニバーサルデザインの手法やアート制作で、人と人の結びつきを新たな方向へと導く（提言する）ところまで到達する。またこうした匂いによる作品を、ユニバーサルデザインやアートによってアウトプットするという手法も、今後の社会へのダイレクトかつ親しみやすさで、多大な普及力をもつという意義をなすと考えられる。

この科研費取得が当研究会の方向性を決定づけ、当面はこうした目的、計画に沿って研究を進めることとなった。

２．あらしやま健光園における「記憶と匂い」のヒアリング調査

味と匂いを利用してアート作品を制作したり、デザインをしたりするためには、味と匂いが日常生活や個人のライフヒストリー、または時代の大きな潮流においてどのように人に関わるかを知っておくべきである。しかし、味覚と嗅覚に関する先行研究は意外に少なく、文献渉猟による大きな成果は得られない状況であった。

そのような中で、研究メンバーである味香り戦略研究所の井上貴元氏の指導の下、記憶と匂いの関係をさぐるヒアリング調査を実施し、今後の研究の基礎データとすることとした。

なぜ「記憶と匂い」なのか。我々には様々な記憶が残っており、それがある時その記憶に関連した事象に出会った時に突如として「なつかしい思い出」としてよみがえってくることがある。その思い出を活性化させる器官のうちで、我々が高齢になっても最後まで大きく残っている感覚器官は嗅覚ではないかと言われている。

そこで、特に高齢者を対象にヒアリングテストを実施し、記憶と匂いの関係がどのようなものであるかを探ることとした。ヒアリング対象として、本学向いに位置する高齢者福祉総合施設「あらしやま健光園」の入所者の方々男女25名に依頼した。また、ヒアリングの実施方法は、高齢者の方の不安を煽らないために、若い本学の学生たちにおしゃべりをするようなかたちで思い出の香りを聞き出してもらうというスタイルをとることにした。

プレテストとして、研究メンバーで2012年末より2013年年明けまでに身近な人々197名に「好きな匂い」「嫌いな匂い」について自由に語ってもらい、その傾向性を分析した。

その結果、このプレテストに登場した語群の中から記憶に関わるタームとして「食べ物」「場所」「故郷」「家族」「花」の五項目が抽出できた。特に食べ物・花が多く、予想外の結果も少なくなかった。

したがって、本調査ではこの五項目に関して、高齢者に対する学生の一対一との口頭質問形式で行った。また回答者の調査前後の心理状態を把握するためにＳＤ法（semantic differential scale method）に基づいた質問も実施した。この調査は高齢者の方から匂いの記憶を聞き出すためのものであったが、調査後の報告書には学生から「高齢者の方からお話を聞く機会が今までなかったので新鮮だった」「また行きたい」など、多数の肯定的な感想が寄せられた。単に昔のことを聞く、というだけではなく、若い人に昔のことを話すということは、高齢者の方にも若い人にとっても穏やかでよい時間であったと思われる。学生によっては3時間近く話し込んだ人もおり、相互に楽しい時間であったことがうかがわれた。

この調査結果の分析報告は2013年10月31日に本学にて味香り戦略研究所の井上貴元氏によって行われ、研究会メンバーや調査を実施した学生、健光園の入居者やスタッフが報告を受け、討論を行った。

「記憶と匂い」についてのこの調査を下に、来年2014年度には関連学会にて学会発表と香りによるユニバーサルデザインを実施・発表の予定である。

３．健光園「匂いのアート」学生プロジェクト

本研究の特徴は、基礎データを精査の上、最終的には匂いに関わるアートやデザインでその結果・考察を形にしていく点があげられる。

アート制作に関しては、あらしやま健光園のご厚意により、ショートステイの部屋に本研究会メンバーの山本直樹研究室の学生メンバーが年に２～３回、香りのアート作品を展示させていただくこととなった。

2013年度は、年末までに2つの作品を展示した。以下、展示企画を実施した本学学生二人による報告を掲載する。

【健光園　匂いの学生プロジェクト　その１】

作品名：Although a color smells…（色は匂えど）
メンバー：　梅津順一、可児葉月、三好香織、松山彩実、山下比香理、山村朱乃
展示期間：　2013年5月～

文責：梅津順一

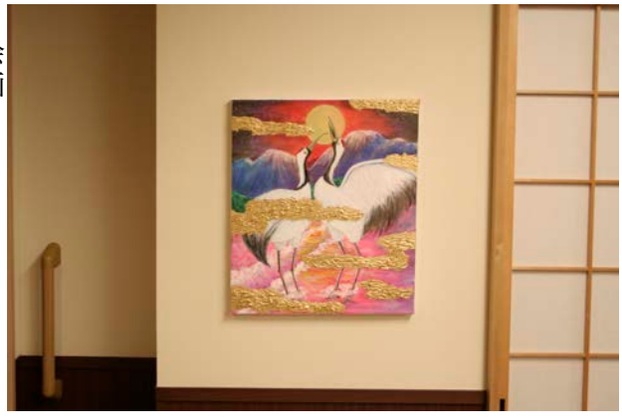
「匂い」をテーマにしたインスタレーションを行った。色、文章、匂いを使ってより来訪者の喜びを手助けする空間をつくり、また、色、文章、匂いと記憶との関連性を調べるという動機をもとに今回の展示を行った。

展示するにあたって、利用者をより多くの方面から刺激する方法を議論した。その一つが、大方の人が知っている文章を利用する事で、古い記憶を呼び覚ますことが出来るのではないか、ということである。よって作品のタイトルにもなっている、「Although a color smells…」（色は匂えど）から始まるいろは歌をもとに、文字・図像を制作し作品に使用している。昔流し読んだ本には確か、記憶は層のように重なり連なっていると書いてあった。ふと、「あぁ、よく遊んだ幼なじみの家の匂いだ。」とか、店から漂ってくる匂いをかいで、「いつだったか、前もここを通って同じような事を考えていたな。」というように、匂いと同時に昔の記憶がよみがえってくる事がある。視覚よりも密接に記憶と関わる部分を引き出す事を目的に制作した。

作品の点数は、正面玄関に1点（210×70）左右の空間に2点ずつ計4点（50×50）である。通気性の事を考え木材で木枠を作り、そこに綿布・布を張っている。

また、香料も人工香料ではなく、複数の自然香料を調合し、場と作品にあった匂いを一つ一つ変えて作っている。健光園は正面玄関、入って右側の居住スペース・左側の居住スペースと大きく３つのスペースに分ける事ができた。左側の方が夕方の日差しが大きく入り込み暖かい空間が広がっている。対して右側は、東からの光が入り込み、道路に面していてどちらかというと冴えた印象の空間が広がっている。場の意味と雰囲気を踏まえ、右側の空間をシトラスな香り、樹木の香りをベースに匂いを造り、左側の空間を暖かい花やオレンジといった香り、玄関は複数匂いを調香し華やかな空間を目指した。色彩も空間と調和するように、右側の空間を寒色系、左側の空間を暖色系の色味を使いまとまりをもって制作している。また、香油の特質としてものによって匂いを発散する時間が違い、早いもので半日、長いもので3日ほど匂いが持続するため、時間帯によって違った香りが楽しめるように工夫されている。使った香りとしては、オレンジ・イランイラン・パイン・ローズ・グレープフルーツ・ベルガモット・ラベンダー・フランキンセンス・ジンジャーなどである。

匂いを絵画の裏に仕込み、視覚的に鑑賞すると同時に嗅覚でも鑑賞してもらうため、支持体を通気しやすい綿布・布を選んでいる。また、厚く絵の具を塗りこんでしまうと通気しなくなるので、シンナープリントによって印刷した文字・図像を布に直接転写する方法を選んだ。シンナープリントによる滲みが匂いをイメージさせ、視覚と嗅覚で感じる刺激を違和感なく同じ作品であるという認識をさせる手助けをしていたように感じる。



絵画の展示はいろいろとやっているが、匂いと絵画作品を同時に展示するという試みはあまりない事で、いくつか難しいところがあった。一つには匂いはとても個人的なもので好き嫌いが分かれるという点。バラの匂いが好きな人もいれば、嫌な匂いと感じる人もいる。それにも、関わらず視覚とは違い目をそらせば見えなくなるものでもなく、匂いは拒否しようとしても空間に広がってしまうとどうしても拒めなくなるものである。そのため、なにか問題が起きたときのためにすぐに匂いを遮蔽出来るようにふたのある容器の中に匂いのもとを入れて展示した。また、香油では3日ほどで匂いがすべて揮発してしまいなくなってしまう。そのため、メンバーが交代で3日おきに変えにいかなくてはならずとても大変であった。

匂いをアートに使用する事へのこれからの展開や可能性をあげてみたいと思う。匂いは形のないものである。しかし、視覚・聴覚より本能に大きく語りかけるものである。匂いそのものを芸術として扱う世界はあるが、匂いと視覚を関連づけてアートに結びつけるものは少ない。日本において香りは、香道やお線香など様々な場所で文化に取り入れており、文化としても他の国よりも奥が深いものである。目に見えないものを伝えようとするアーティストにとって香りは絶好の媒体である。今は、視覚作品を香りが手助けするような作品を提示しているが、今後は香りそのものが視覚・視覚的イメージに作用をもたらすものを作りたい。匂いは目には見えないし、何処が境界かはわからないけれど、匂いを感じたときにそこに１つのまとまりある空間を感じる。そのような目に見えないが認識される境界を使った作品や、そこにある世界を思わせる作品を作れるのではないかと考えている。

また、人間眠っているとき、視覚・聴覚は遮断されるが嗅覚は遮断される事がないらいしい。寝ている

ときに感じる匂いが、夢というビジョンにどのように影響を与えていくのか、夢を作る事は出来るのか。そのような、作品があっても良いのではないかと考えている。

【健光園　匂いの学生プロジェクト　その２】

作品名：　鶴
メンバー：　松山彩実、梅津順一、可児葉月、山下比香理、玉井頌子
展示期間：　2013年11月～

文責：　松山彩実

皆さんは、「鶴」の匂いを想像で出来るであろうか。　表現することは出来るであろうか。よほど鶴と密接に関わっている環境では無い限り、それは難しいと思われる。
けれど、ビジュアルとしての鶴は「折り紙」「日本画」など日本人として潜在的に親しみやすいモチーフである。　そんな「鶴」をテーマにしたF10号サイズ３点（１点530×455）絵画を制作し、その絵画に鶴とは関係のない香を発するとすれば客観的にどのような反応が返ってくるのか疑問に感じたのが作品の制作動機である。
この展示案は、日本の伝統的な芸道である香道からヒントを得た。　香道とは、一定の作法に基づいて香木を焚き、立ち上がる香を鑑賞するものである。　「香遊び」とも言うこともあり、香木の香を嗅ぎ鑑賞する「聞香」と香を嗅ぎ分ける遊びである「組香」の二種類が主な要素である。　この香道の作法に基づいて「絵画と香り」つまり「視覚×嗅覚」でクイズ形式の展示を試みようと考えた。また展示空間にアンケートを配置し、鑑賞者からの具体的な声に耳を傾けられるようにした。

「視覚×嗅覚」

しかし、絵画に香をつけて提示するという行為がどこまで有効なのか疑問であった。
「味覚×嗅覚」に関連性があるのは日常的に感じられるであろう。一番の例が食事である。味覚は、「おいしい」「まずい」などの基本五味だけでなく、口にしたものが食用に適するか人体に有益かどうか判断する役割を担っている。初めての食べ物を口に入れるまえに匂いを嗅ぐ行為は、食べて危険はないか、美味しいかどうかの情報を得るためである。　「匂い」は、重要な要素でこの味覚と嗅覚の感覚を総称して「風味」と呼ぶ。
では、「視覚×嗅覚」の関係性についてはどうであろう。　これは、あくまでも私の考えであるが、例えば、絵画の情報量（ビジュアル的表現）が多いと発している香りは気にならないかもしれず、逆に絵画の情報内容（モチーフ・テーマ性）が香りと反している場合、人は気分を害するかもしれない。作品から香りを発する事により、制作者が提示した内容よりも、鑑賞者が感じ取るメッセージ性や想像力が、絵画としての深みをかき立てるかも知れない。

私は、絵画を制作している人間として鑑賞者が立ち止まって絵画を見てくれる絵こそ、ある種の勝ち組の絵画なのではないかと考えがあった。
それは、絵画における表現性やメッセージ性あるいは、客観的に見て「下手くそ」などの見るに堪えがたい絵画として捉えられて立ち止まったとしてもである。
私が描いた絵画に対してどのような手段を持って人が立ち止まって鑑賞してくれるのかを考えて出した結果が「視覚表現に香りをつける」ことである。　絵画から香りを発しているだけでも鑑賞者は「疑問」「違和感」を感じて立ち止まってくれるのではないのかと考えたのである。
しかし、「視覚×嗅覚」の関連性について難しい点は、実験するにあたり確実に「視覚×嗅覚」だけの環境することが不可能なことである。　触覚（皮膚感覚）は絶えず機能し唾液の味として味覚もあり体調により味は変化するであろう。なので、正確な結果が出ない可能性がある点に難しさや未知の部分が多いと感じられる。
この展示によって結果的に「視覚×嗅覚」の関連性が立証されれば、今後の展開としてインスタレーションすなわち空間芸術の分野として匂いを取り入れて表現をしていくことができるであろう。
例えば、空間的にトゲトゲとした一見鋭く冷たい印象を与える場に、「ふわっとした」甘みのある暖かみを感じる香りを与えると、果たして鑑賞者からどのような反応が返ってくるのであろうか。関連性があるのならビジュアルと香りを同系にしても面白いだろう。ビジュアルと香りを同系にすることにより効果を増大にさせるのならば、病院や駅などの公共スペースでの活用も可能性がある。病院なら日々の病棟生活での不安を少しでも改善を図れるかもしれず、駅ならば毎日の通勤通学の鬱憤をはらし、人身事故を未然に防ぐ事が可能だと思われるからである。
「視覚×嗅覚」については、可能性と未知の部分が多いゆえに、より私には面白いと感じられる。

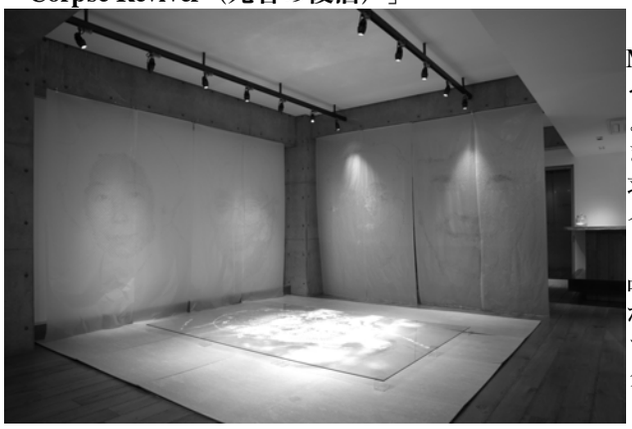
４．山本直樹　香りによるアート

【感覚 - 匂い、香りにおける作品制作について】

文責：山本直樹

私自身の作品制作の基軸は「感覚」「記憶」「社会」の３つである。表現形態は絵画からインスタレーションへと変化してきたが、これらの３要素は学生時代から変わりなく、現在に至っている。しかし、２年程前からその中の「感覚」領域が、砂糖、飴、チョコレートなどの「甘味による味覚」から、「匂い、香りにまつわる嗅覚」を中心とした作品制作に移行してきている。その理由として1.もともと味覚と嗅覚は繋がりが深く、味覚だけを絞って制作するには無理が出てきたこと、2.今回の作品制作にとって大切な要素の匂い、香り–嗅覚は、味覚以上に「記憶」に密接な関わりをもっていること、3.従来型のモノに頼ったイメージ形態表現でなく、鑑賞者の脳内でイメージを作り出し、新たな空間表現に展開していく等、があげられる。ここでは感覚の一領域である「嗅覚—匂い、香り」を基軸としながら他の軸（記憶、社会）とも絡め、２０１３年に行った作品制作について述べていく。

「Corpse Reviver（死者の復活）」



2013 年 6 月 11 日 ～ 6 月 23 日 京 都 の Art Space MEISEIにて、個展「Corpse Reviver」を開催した。それまでの油彩を中心とした絵画作品から、1994年より甘味によるインスタレーション作品を発表してきたが、今回の作品はそれだけでなく、嗅覚にも訴求した匂い、香りを含んだ作品である。ここではタイトルが示すとおり「死者を蘇らせる」テーマのもと、約0.1×5×5mの床置き作品１点と、2.7×2.3mの作品4点、2.7×1.1mの作品５点、小作品２点の計13点からなるインスタレーション作品と、デジタルカメラ、PC、プロジェクターを用いて作品をつくるワークショップ・スペースの２つの空間構成とした。

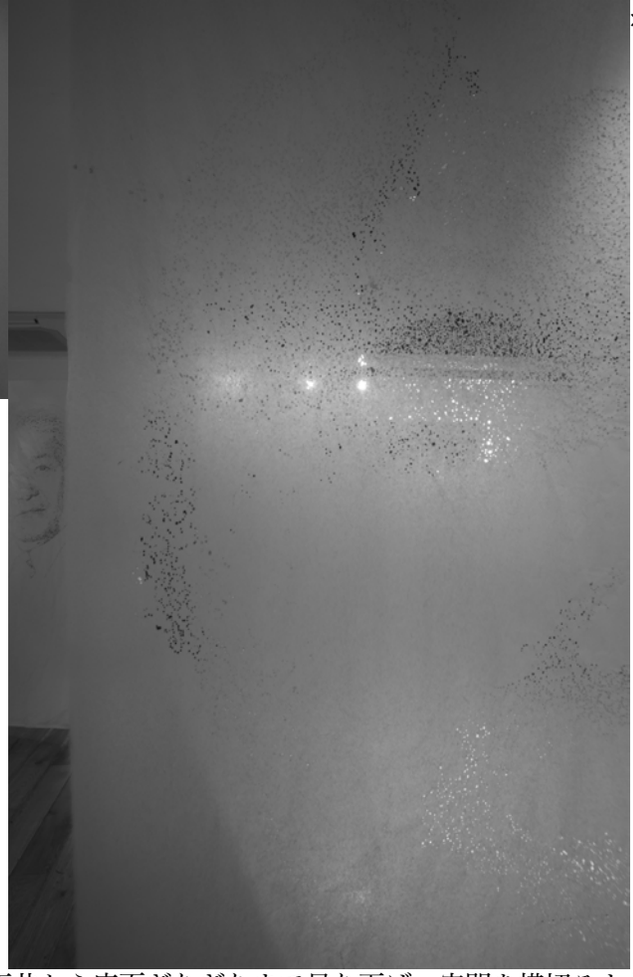
-死とは何か-

私は展覧会を行う前、その場所のリサーチからはじめる。それは今回の様なギャラリー空間という、美術作品を展示するために中性化された場であっても、ギャラリー周辺の環境や室内の特徴を生かすことで、その場でしか成し得ないSite-Specific（場所の特性）を含んだ、外に拡がる独自性のあるものになるからだ。このギャラリーは京都の寺町丸太町に近く、空間は正面と裏面がガラス張りの、明るい開放感があってホワイトキューブのギャラリーとは趣が異なる。ギャラリーのガラス扉を開くと、薫風と共に隣接したお寺の心地よいお香が漂う。このお寺は平安中期寛弘元年（1004年）「革堂（こうどう）」と呼ばれる天台宗行願寺である。

創建した僧の行円は、仏門入前時は狩猟を生業にしていたが、ある時あやまって身ごもった母鹿を射てしまい、無常を感じる。それ以後は僧となって母鹿の毛皮を終生纏い、供養し続けたという。これを知って私は、東北大震災による津波で多くの死者を出した宮城県の山元町へ昨年の春、ボランティアに従事した経験を想起した。活動中、町の人々から死者
に対する後悔、惜別の情を訴える数多くの声を耳にしたのだ。また私事であるが、母が亡くなって１０年、父が亡くなって６年が経ち、未だ両親への想いが断ち切り難い。年を重ねる度に「死とは何か」「死んだら何処へいくのか」「再び会うことはできないのか」「死んだ両親に想いを伝え、懺悔したい」との気持ちが強くなる。この想いをお香に包まれながら死について制作・探究し、「死者と対話する場」をつくりたい—以上の思いからCorpse Reviverを制作することになった。

-行為から現象への形態—

前述したギャラリー空間の特性を生かすべく、作品の要素として「お香」「光」「風」を取り入れることにした。作品は、ひじょうに軽く丈夫な縦2.7m



横1.1m×13枚）の薄手和紙（土佐産雁皮紙）を、天井から床面ぎりぎりまで吊り下げ、空間を横切るように流れる風の通り道に対峙する様、それらを設置した。和紙には、私の亡き両親、親族や身近な人々の亡くなったご家族の肖像写真をスキャンしたものをPCに取り込み加工後、プロジェクターに投影しながら点描風の「陰影」を線香（松栄堂製「南山」、「南州」）で焼いて描いた。

こうすることで本来、暗くなるべき顔の陰影部分は、焼くことで小さい穴が空いて、それらの点々から向こうの風景や光が差し込んでくる。また、光の当たり方によっては白い平面空間のみで何もない様にみえる。注意してみないと気付かないし、描かれた像自体もかたちが判別し辛い。元々この技法はフレスコ技法から来ており、漆喰の壁面に下絵を転写する時に用いられる技法であるが、ここでは下絵自体が作品である。鑑賞者は作品に近づいてみた時には、線香の温度/時間差による焼かれた偶然性による穴のかたちや、穴からの風景をみる。一方で離れていくにつれて肖像のかたちが表われる。さらにお香が立ち籠める静謐な空間内で、差し込む光やモノの影が移ろい、風に吹かれて描かれた和紙が揺れ動く。その時に、五感を刺激する様々な情報やイメージが眼前に、「ふっと」生まれ出て、それが「気配」として感じられる様になる。そこではじめて「死者と対面すること」になるのだ。

-記憶を想起する場-

もう一つ、ギャラリー奥のスペースに机、天井にプロジェクターを備え、観客も実際に制作する「ワークショップ」の場を設けた。ここでは制作過程をみせる場としてだけでなく、実際に亡くなった親族を持つ観客からの申し出があれば制作できる様にしたところ、数名の申し出があった。その中で印象的だったのは、ご子息を亡くされたTさん夫妻である。制作前は意気消沈しており、特にお母様はみていて痛々しい限りであった。しかし、取り込んだ画像をプロジェクターから投影された遺影の陰影を、最初は罪悪感も入り混じりながら、恐る恐る焼いていく。しかし、時が経つにつれ「ここは似ている」「こんなかたちだったかしら」と生前の息子さんをあらためて思い出している様であった。完成後、ギャラリーに展示すると、夫妻は驚嘆の声をあげ、喜ばれた。私たちは息子さんの生前のことや死因など詳細を語り合わなかったが、充分に意思疎通を行えた。そしてふたりは作品の「息子さん」に優しく話しかけ、安らかな表情で帰られた（作品は個展終了後、全ての遺族に手渡した）。

-何故焼くのか-

今回の個展では、お線香で焼いて描く「行為」と、匂い、香りを媒体にした「嗅覚」感覚にまで<同時に>広げたところがこれまで制作してきたことと違う点である。そもそも何故絵具で描かずに線香で描いたのか。この理由として、絵具で描くことは紙やキャンバスに顔料、染料、メディウムを擦りつける行為であり、死を扱うには物質感が強く出てしまい、生々し過ぎる。それに対し、焼く行為は物質としては残らず、燃やすという、エネルギーへの変化がそこにあるだけだ。さらにこの行いは新たな次元へと導き、「かつて生きていた」という証を残す。何故なら死者を描く際、プロジェクターから投影された画像は

バーチャルな像であり、それは光が当てられる時だけ存在する。その陰影を焼くことで幻は「痕跡」として平面上に残り、そして新たな空間として３次元の穴が生まれ、それらの集合体が「重さをもたない肖像」として存在する。

-香りと記憶、イメージ-

それでは、ここでの「匂い、香り」はどの様な意味をもっているのか。お香、香料は古代より仏教、キリスト教、イスラム教等の宗教上の儀式に用いられた。また、お香の煙は神と人間とを繋ぐ道筋であり、人体を清め、悪霊を追い払うものでもあった。そして、死者や生け贄の匂いを消臭する効果として使われた様である（中村祥二著『調香師の手帖』朝日文庫　P116）。勿論、この展示空間には本物の死者は扱っていないが、宗教的な荘厳、深遠な空間を演出する意図で線香を使用した。

もう一つは「プルースト効果」と呼ばれる、フランスの小説家マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の文中において、主人公が紅茶に浸したマドレーヌの香りと味をきっかけに過去の記憶に結び付けられた同じ匂いを嗅ぎ、味わうことで過去全体を呼び起こすことがあげられる。これは以前から制作してきた「甘味」素材を使用した制作理由と同一であり、今回の線香による匂い、香りも時空をタイムスリップする乗り物の様な働きをしている。

１９世紀の夢の研究家エルヴェ・ド・サン・ドニ侯爵は、ある女性のイメージと爽やかな香りのするアイリスの根を繰り返し嗅いでそれらを結びつけるトレーニングをした。その後、寝る前にアイリスを口に含むことで、自由自在に心の奥底にまでその女性を夢見ることができた（植島啓司著『物質化された誘惑』においの生理学 ポーラ文化研究所 P26）。このように私たちは一度匂いを嗅ぐだけで、十年前に嗅いだ匂いでも数千種類の匂いの中から特定の1つを選ぶことができると言われている。つまり、嗅覚は他の感覚（視覚、聴覚、味覚、触覚）と連動しやすい理由で記憶と深く結びついている。私はここに美術の新しい可能性を感じる。何故なら視覚による「形態」という、現実の鎖に囚われていた美の世界から匂い、香りによって脱出し、思うがまま湧き上がるイメージを拡げて飛び立つことができるからである。しかも大げさな装置は殆ど必要としない。極めてシンプルで奥深い（ただし鑑賞者は相当のトレーニングが必要である）。

–今後の制作について–

今回の個展は「Corpse Reviver死者の復活＝死者との対話の場」をつくることにあった。その様な場は既に神社、寺院、教会等あるが、私が本当につくりたいのは絶対の主を敬う場づくりではなく、対話の場＝自分自身をみつめる時空間＝内省の場をつくることにあった。私は元来、「自分」の感情や思いを作品に込めてしまうと、空回りしてしまい、結果的に表現したいものが伝わらない場合が多い。出来るだけ自我をなくし、客観的な視点をもって心を無にして薄い和紙に火のついた線香で燃やし穴をあける。すると思わぬ作品が出来上がる。特に最近は「巫女」になったつもりで丁寧に、こころを開いて自己を、意識をしないで目先にあるものを写経する様に行う。すると、外界が突然開けて、自分がそれに溶けていく様な感覚と同時に、ふだんみえない風景がみえてくる。そうすることで自分が聞こえなかった音が伝わり、漂っている香りの塊がみえ、何者かの気配の輪郭が掴めるようになるのだ。

今後この制作は、観客の方々が中心になって死者を弔っていくプロジェクト型ワークショップとして展開していきたい。東北大震災の被災した学校や、戦争やテロで多くの犠牲者を出した海外諸地域で行うことで、風化してしまう記憶を線香によって痕跡に留め、「死者と対話＝内省の場」をつくっていく。その方々と語らいながら、まだ結論がみえていない「死とは何か」「死んだら何処にいくのか」について考えていきたい。

５．味と匂い研究会、今後の展望

以上のように、2013年度は匂いと記憶に関わる基礎データを得ることができ、種々の匂いに関わるアート作品を世に送り出すことが出来た。

こうしたテーマには類似のものが少なく、まだまだ手探りの状態であるが、失敗を恐れずに様々な挑戦をし、その結果を着実に積み重ねて世に発信していきたい。

来年度は匂いのアート作品に加え、科研のテーマでもある、「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作と理論構築に着手する予定である。

また、作品展示、理論研究もともに海外での活躍を念頭におき、すでにいくつかの案が実現しようとしている。例えば、フランスのパリ第一大学のＫＯＤＯ研究所との共同研究や、翻訳による知見導入、パリ

でのアート作品展示などを企画している。
　当研究会が本学から世界に向って展開していくことが来年度の目標でもある。